

最後の4年間

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんの多くが阪神淡路大震災の前後に生まれたことを思うと、ここまでお育てになった保護者の方々のご苦勞に感謝するとともに、心からお慶びを申しあげたいと思います。新入生の皆さんは、今、いろいろと新しい生活への不安を抱えながらも、期待に胸をときめかせているのではないかと思います。

自分で決める

大学が高校までの学校と大きく違うことの一つとして強調しておきたいことがあります。それは、大学というところでは、何よりも「自分で決める」ということが期待されているということです。例えば、明日からのオリエンテーションの後、来週8日から授業が始まりますが、何時にどの教室に行くかは、自分で決める必要があります。

授業科目の中には、必修科目と言って、自分の学籍番号で、とるべき科目、時間、教室などが決まっているものもありますが、それ以外の科目については、自分でとるかとらないかを決めていきます。つまり、時間割は、高校までと違って、自分で作っていくこととなります。同じ学科の友達だからといって、同じ時間割になるとは限りません。

とは言っても、一人ぼっちで教室に行くのはいやだから、できるだけ友達と同じ科目をとるようにしよう、と考えている人もいるかもしれません。もちろん、楽しく授業に出るということは大切なことなので、悪いことではありませんが、とるべき授業科目の選択は、あくまでも、自分自身がこれからの4年間で何を身につけて社会に出ていきたいかということによって決まる、ということをお忘れしないで下さい。

友達と平和

大学では、高校までの友達とはいろいろな意味で違った友達ができるし、作りたいと思っている人もいます。「友達」というのは英語で何と言うか知っていますか？（当然知っていますよね。）friend ですね。英語の friend というのは「友達」よりも幅広く使われていて、いろいろな意味があります。「後援者」とか「支持者」という意味もありますし、「敵・味方」というときの「味方」という意味もあります。friendly というように、-ly を付けると、「友達のような」という意味になりますが、そこから発展して、「親しみやすい」という意味にもなります。例えば、最近ですと、ecologically friendly 「環境に親しみやすい」つまり「環境にやさしい」という意味でも friendly ということばは使われます。それから、friendship というように、-ship をつけると「友情」ですが、これは、国と国との間でも使われて、その場合には「友情」というよりは「友好」という意味になります。

こういう、いろいろな意味をもったことばが friend ということばですが、どうしてこんないろいろな意味になるのかと言うと、多分、「友達」friend というのが、心を和ませる、やさしいものであるということから来ているのではないかと思います。それが人だけでなく、国のような大きなものに対しても使われると、「平和」をもたらしてくれる存在ということになると言えるかもしれません。

平和の祈り

皆さんが入学したこの大学は、120年ぐらい前にイギリスから来た、「聖公会」というキリスト教の宗派の宣教師によって作られた女学校が元となっています。この神戸松蔭という学校とキリスト教との詳しい関係は、1年生のときの必修科目の授業で習いますが、今日は、あまり難しいことは考えずに、この「平和」ということばに関連して、わかりやすいと思われる話をしたいと思います。

先日、ローマのバチカンで、新しい教皇が選ばれました。教皇というのはカトリックの最高位の聖職者です。この話は、キリスト教徒でない人にも大きな話題となったので、知っている人も多いと思います。新しい教皇は、選ばれてから、教皇としての名として、「フランシスコ」という名前を選びました。これは、12世紀から13世紀に生きた「アッシジのフランチェスコ」（「フランチェスコ」というのは「フランシスコ」のイタリア語の読みです）あるいは「聖フランシスコ」といわれるイタリアの修道士の名前に由来すると言われていています。

その聖フランシスコの名前が付けられた「平和の祈り」という祈祷文があります。これは20世紀になってからフランス語で作られたという話もあるので、内容はいかにも聖フランシスコにふさわしいのですが、作者は別の人ではないかという風に思われています。

少し長いので全文を紹介はできませんが、キーワードをとり上げると、「憎しみ」の代わりに「愛」を、「争い」の代わりに「赦し」を、「分裂」の代わりに「一致」を、「疑い」の代わりに「信頼」を、「誤り」の代わりに「真理」を、「絶望」の代わりに「希望」を、「悲しみ」の代わりに「喜び」を、「暗闇」の代わりに「光」を、というように、否定的なことばを全部肯定的なことばで置きかえることを訴えています。また、「なぐさめられる」ことよりも「なぐさめる」ことを、「理解される」ことよりも「理解する」ことを、「愛される」ことよりも「愛する」ことを、というように、受身、受動的にならず、より積極的に能動的に生きることを希望しています。

皆さんも、大学生である間に、人生を肯定して生きる生き方を身につけ、受身でなく自ら考え行動する力をつけて、したたかに生きていくことができる人になってほしいと思います。

風に吹かれて

「平和」ということに関連して、もう一つ、1960年代のフォークソングを紹介しておきたいと思います。Bob Dylan というアメリカ人ですが、聞いたことのある人、いるでしょうか？ ちょっと古い人ですが、今ではネットでいくらでも当時の映像が見つかりますので、興味をもった人はあとで調べてみて下さい。因みに、この人はまだ生きておりますので、最近の映像も見つかるかもしれません。

Bob Dylan は数々のヒット曲を生み出しましたが、その中の一つに「風に吹かれて」Blowin' in the Wind というのがあります。これも歌詞を全部紹介していく時間はないのですが、「人が一人前と呼ばれるまでにどれだけの道を歩かなくてはいけないのか」「鳩が砂地で休めるまでにどれだけの海を越えて飛ばなくてはいけないのか」など、すべて how many で始まる歌詞が繰り返されます。

これが「平和」を訴えた歌とされるのは、歌詞の中に「砲弾が禁止されるまでにどれだけ飛ばなくてはいけないのか」「人が自由になるまでにどれだけ生きていかななくてはいけないのか」「あまりにも多くの人が死んだということを知るまでにどれだけの人が死ななくてはいけ

ないのか」というような、戦争とか、人種差別、当時のアメリカの公民権運動、そういうものを示唆する歌詞が出てくるからだと言われています。

このタイトルの「風に吹かれて」というのは、このような質問、how many で始まる質問に対する答が、すべて、blowin' in the wind 「風に吹かれて揺れている、舞っている」ということから来ています。

この歌自身は how many? という質問に対して、直接答は述べていません。ただ、今のままでは「多すぎる」ということは伝わってくると思います。そして、力を合わせて、少なくしていこう、と思うように人々に誘いかけているように思います。

大学生活での how many

歌詞の中に、「人が空を見ることができるといつまで何回見上げなくてはいけないのか」「人々が泣いていることが聞こえるようになるまでにいくつの耳をもたなくてはいけないのか」という部分もあります。これは、これからの大学生としての生き方にも関わってくると思います。勉強や人間関係でうまくいかないときに、how many? 「いつまで」あるいは「あと何回」こんな状態に耐えなくてはならないのか、と思うときが来るかもしれません。

例えば、ものすごく身近で卑近な例を言うと、「あと何週間授業を受けたら夏休みになるのか」とか「あと何単位とったら卒業できるのか」とかですね。これは、人によっては切実な問題ですけれども、風とは関係なく、カレンダーとか自分の成績表を見ればすぐに答が出てきます。ですから、そういう意味では、それほど深刻な問題ではありません。

でも、長い大学生活の中では、すぐに答が出なくて、風の中で舞っているようにしか思えないような問題に直面することも出てくると思います。そんなときに、how many? と風に聞いても答は教えてくれません。最初に言ったように、自分で考えて自分で答を出さなくてはならないこととなります。

風に吹かれても

何だか入学早々つき離すような言い方をしていますが、われわれ教員・職員というのは、この how many? に対する答は直接教えることはできません。けれども、風に舞っている答が遠くへ飛んでいってしまわないように押さえておくことはできます。大学生なんですから、もう、手とり足とりの指導はしませんが、手の正しい動かし方、足のよりよい方向への向け方などは、お手伝いすることができると思います。大学というところをそういうところだと思って、自分で考えて行動するのではあるけれども、せつかくここに施設があり、人々がいるのだから、それらを十分に活用して行って頂きたいと思います。

多くの人にとって、大学生活の4年間が学生としての最後の4年間になると思いますが、それと同時に、自力でたくましく生きていく最初の4年間になることを期待しています。